

2010.12.18

生命の「若返り」としての子育て ～なぜ、フレーベルは幼児教育に回帰したのか？～

岸 信行 (中央大学)

1. はじめに

フレーベルは、自己の教育理想を実現すべく、カイルハウに学園を創設した後⁽¹⁾、多くの多難な道乗り越え、時には、ひどい迫害さえも刺激として、自らの教育理想の実現に邁進した。そして、1835年5月末から1836年にかけて、スイスのベルン(Bern)州政府の招聘に応じ、かつてはペスタロッチーも活動していた、ブルクドルフ(Burgdorf)の孤児院長になっている。この時フレーベルはすでに53歳であったが、そこでの体験から、翌年の年頭に友人にあて「1836年は生命の革新を要求する」と題する論文⁽²⁾を書き、真の人間教育の目標到達のために、生活の革命を叫んだ。この論文は、フレーベルの全思想の根底にあった道徳的な衝動としての「生の革新(Lebenserneuerung)」を哲学的に表明したものである。

本発表においては、その論文の内容から、なぜ、フレーベルが年齢を増すにつれて幼児教育に回帰していったのかを、当時の情勢を考慮に入れながら探求する。

2. 「1836年は生命の革新を要求する」という論文

フレーベルは、『人間教育』で強調した「子どもと共に生きる大人の生活」の必要性を、10年後のその論文によって、哲学的に基礎づけた。彼が、生命の革新において、家庭教育を重視したのは、大人の生命を新鮮なものとする力を「子どもの生命」、なかんずく「乳児・幼児の生命」に見たからである。すなわち、フレーベルは、未来社会の建設を子どもに託したのであった。

フレーベルがその論文で実現させんとした「生の概念」とは、ルソーが文明の中で外面的になってしまった生活に対して、「生」の直接性と根源性を主張して「自然に帰れ」と叫んだことに通じる鋭い現実批判を含むものであった。

フレーベルの、そのような生命の革新を訴える内的動機は、大人たちの生活が、死んだ知識に凍結して、空虚なものになってしまっていることへの鋭い批判として、既に『人間教育』の中に鮮明に表明されていた⁽³⁾。

3. 生命革新と若返りの「時」

フレーベルによれば、おとなたちの社会生活における言葉や談話は、内実のない外皮であり、生命のない操り人形、内面的価値のないゲームの計算札に過ぎない。彼は、大人たちの談話が空虚で無内容なのは、「内面的にも外面的にも、即ち直観の面でも創造の面でも、豊かな生命から生れ出たものではなく、対象の事実直観(Sachanschauung)に欠けているからこそ、まさにそれゆえにこそ、われわれの生命は、かくも貧弱なものとなり、ひいては、われわれの子どもたちの生命もまた、貧弱なものになるのだという。だからこそ、われわれには、響きは聞えるが、その表象は生じない。われわれには、騒音は聞えるが、なんら具体的な行為も見えないのである⁽⁴⁾。

このような現実生活の批判の後で、フレーベルは、おとなたちの生活に反省をうながし、自分

たちの生活が、うつろでむなし内容のない生命の直観に欠けたものであることがわかったら、「子どもたちのところに赴こうではないか」^⑤と言う。

ここに、フレーベルの標語である「いざ、われわれは子どもたちと共に生きようではないか (Kommt, laßt uns unseren Kindern leben !)」という彼の中心思想をうかがうことができる。フレーベルの後期の著作の巻頭にモットーとして掲げられた次の重要な言葉は、この連関において初めて生じる。「子どもたちと生きようではないか。そうすれば、子どもたちの生命は、われわれに平和と喜びをもたらすであろう。そうすれば、われわれは賢明になり始めるであろう。いや賢明であり始めるであろう！」^⑥。

4.人間性実現への新たな段階

フレーベルが、標語とした「われわれは子どもたちと一緒に生きて生きよう」^⑦という呼びかけは、大人たちが、子どもと一緒に時を過ごし、生活を共にしようということではあるが、しかし、それは、単なる教育方法としての表面的な関わり以上の深い意味をもつ。すなわち、大人たちが、子どもの根源的な真正な生命にふれ、現実の生活で弱まってしまったか、あるいは全くなくなってしまったかも知れない「根源的生」を、子どもの、まだ硬直化していない初期の真に力強い生命から回復させ、再び「人間的生の純粋な根源」へと回帰させ、瑞々しい「生」をとりもどそうとする「生の哲学」に裏づけられた提案であった。そこでは、子どもが大人に教えられるだけではなく、逆に大人が子どもとの関わりの中で教育されるという教育連関の逆転が見られる^⑧。

従って、「子どもとともに生きよう」という彼の呼びかけは、大人が子どものところに行って子どもを思うがままに、その権威でおさえつけようという意味とは逆なのであるが、しかし、その意味は、一般に解釈されるような、センチメンタルな教育的感傷を超えたところに、その深い哲学的な意味が存していた。すなわち、それは、むしろ大人たちに向けられた具体的な道徳的要請であったとも言い得る。

そのような、フレーベルの考え方は、既に『人間教育』の中で強調されていたが、1836年のドイツにおいて、その内容は到底実現不可能であると考えた時、彼は、一見突飛とも思える「移住」を提案し、自己の理想を新天地アメリカにおいて実現させんとし、その理論的試みをなしたと考えられる。フレーベルは、家庭生活における人間生命の革新を、確かにまずドイツ人によって、ドイツ人を通して、ドイツ人から始めるように主張し、その理想は、まずドイツに実現させなければならないと考えた^⑨が、しかし、彼はそのようなことを、単にドイツにのみ要求しただけではなく、他の諸民族のすべてに対しても同じ要求をしていたのである^⑩。

そこで、フレーベルが願ったことは、純粋な人間性が究極的に地上のすべての民族のもとで実現されることであり、地上そのものが再び世界の部分的全体として、地上の全ての生命が再び全体の部分的全体として認識されるようになることだった。^⑪すなわち、彼は、地上界が天上界に高められ、天上界が地上界にもたらされるようにすること^⑫を願ったのである。

その地上界と天上界の統一が実現された状態こそ、彼が理想とする「平和と喜びの一体となった生命」^⑬を意味するものだったわけである。

5.「大人が子どもと共に生きる」ということの意味

フレーベルにとって、生の根源へ回帰するということは、人間が真の本質を実現させるという

ことで、その成果には教育的関わり以外の方法では到達し得ないと考え、人類全体の革新は、まず「生の根源」へ向う教育から出発しなくてはならないと主張するようになった。ここから、「人間と人類の全生活は教育という一つの生活である (Das ganze Leben des Menschen und der Menschheit ist aber Ein Leben der Erziehung)」⁽¹⁴⁾とさえ主張するようになる。

フレーベルが、その一生を通じて成さんとしたことは、子どもとの真の交わりを通じて、純粋な人間性を実現させることであった。カイルハウの教育施設も、幼稚園創設の深い意味も、このような全体的な大きな思想史的、哲学的な背景を考慮に入れなければ、その本質から理解することはとうてい不可能であろう。彼が考案した幼稚園は、単なる教育施設ではなかったし、「恩物 (Gabe)」を始めとする遊具も、単なる子どもを遊ばせる手段であったのではない。彼が考えた「幼稚園」は、子どもの本源的な生命を維持し、大人たちが、自らの生を革新させる場所であった。また遊具は、子どもの本源的な生命と取り巻く大自然の生命とを知らせる媒介物であった。

フレーベルは、子どもの新鮮な若い生命の中に疲労と鈍磨にさらされた成人に活力を与えんとするエネルギーを見出さんと努力したが、そこに、フレーベル教育学の近代性があり、フレーベルの偉大さがあった。彼は、年齢を増すに従い、早期幼児教育の必要性を痛感するようになるが、それは、人間の生が、力強く発揮されるのは、幼年時代、それも、できるだけ原初的な初期の段階に、より純粋な「生」を見出し得ると考えたからにはほかならない。円熟期のフレーベルは、「生の革新」が、乳・幼児の予感と直観の中に、極めて鋭い形で実現し得ることを洞察した。従って、彼は「予感と直観」をその教育学の主要な原理としたのである。

フレーベルは、一般的な浪漫主義、なかんづくノヴァーリスによって主張された「内部への道」を、人間魂の原初的な深淵において考え、その思想を首尾一貫して最後まで考えぬいた思想家と言えるであろう⁽¹⁵⁾。フレーベルにあっては、既存の哲学的思考の単なる教育的な応用が問題だったのではなく、逆に、子どもと接した、その教育的な現実から、初めて包括的な形而上学的連関が開示された。すなわち、フレーベルは、子どもと交わる遊戯の最中であって、深い哲学的な刺激を受け、教育に大切ないくつかの主要な原理が鮮明に見えて来たのだと考えられる。

その意味で、フレーベルの教育哲学は、哲学的な思索を気まぐれにあやつた教育学的な所産なのではなく、「生の哲学」「浪漫主義の哲学」の哲学的思惟の全力をあげて考えぬかれた、壮大な構想をもった教育の形而上学であり、そのような哲学を前提とすることによってのみ、彼の教育学は、正しく理解され得るのである。

6.むすび

考察して来たように、フレーベルの教育哲学は、現実に対する厳しい批判から出発したのであり、因襲的に硬直化し、形骸化してしまった文化における人間の生を、その根源から再びとりもどそうとする文化批判の性格を有していた。彼は、当代のドイツに、その理想的な世界を建設する望みがないと感じられた時、生の革新、生の若返りを叫んで「移住」さえ提案したのであった。

いま、フレーベルと生の哲学者たちとの関係を問題にする時、そこに非常に大きな類似点を見出すことができる。例えば、現代の生の哲学に多大なる影響を及ぼした、彼自身一人の偉大なる生の哲学者ベルグソンの哲学は、近代の自然科学的世界観が、世界を機械化し、物体化しようとすることに対する「生」の側からの痛烈な抗議であったとも言い得る⁽¹⁶⁾。

フレーベルとベルグソンとは、その生きた時代背景が異なっているから、現実認識とその批判の内容、また、その哲学の細部においては相異があろう。しかし、両者とも、人間が置かれた、

現実を徹底して問い、人間の生を、その根本から捉え直そうとした点においては共通している。

そのような意味から、フレーベルを、生の哲学の先駆的役割を果たした教育思想家として取り上げ、混迷する「子育て」支援の一つの方向性を見出そうとする試みもあながち意味無きことではないと考えるのである。

註

- 1) フレーベルのカイルハウ学園当時の状況については次の論文参照。拙稿「カイルハウ学園創立期における『フレーベル教育集団』の結成とその苦悩—学園の危機的状況と構成員相互の交渉—」、中央大学教育学研究会『教育学論集第24集』、1982年所収。
- 2) Fr.Fröbel: *Erneuerung des Lebens fordert das neue Jahr 1836*, hrsg. v. E. Strnad, 1933., in: *Fr.Fröbel's gesammelte Pädagogische Schriften*, h.v. W. Lange, Bd.2.S.499—561. 邦訳: 小原国芳・荘司雅子監修『フレーベル全集第三巻』, 王川大学出版部, 昭和52年, p.522—630.
- 3) Fr.Fröbel, *Ausgewählte Schriften*, h.v. E.Hoffmann, BII, 1951—1968, *Menschenziehung* S.56. 邦訳: 荒井武訳『人間教育』<岩波文庫> 昭和39—45年, p.117—119. フレーベルは言っている「われわれは死んでいる。われわれをとりまいているものは、われわれにとって死んでいる。われわれはどれほど知識をもっているにも空虚である。われわれの子どもたちに対して空虚である。われわれの語ることは、ほとんどすべて虚ろで、空しく、内容も生命もない」
- 4) *ibid.*
- 5) *ibid.*, S.55. 同上訳書 p.117. フレーベルは言っている「かれらを通して、われわれの言葉に内容を、われわれを取りまく事物に生命をあたえよう。それゆえ、かれらと共に生きよう。かれらをわれわれと共に生きさせよう。そうすれば、われわれすべてにとって必要なものをわれわれは子どもを通して手に入れるであろう。」また、彼は言う「われわれがもはや持っていないものを、すなわち子どもの生命が持っているところのあのあらゆるものに生命を吹きこみ、あらゆるものに形象を与えてゆく力を、それを、われわれは子どもたちから、もういちど、われわれの生命のなかに移そうではないか」。
- 6) *ibid.*, S.55. 同上訳書 p.117.
- 7) *ibid.*, S.56. 同上訳書 p.119.
- 8) この「教育連関の逆転」については、次の論文で考察した。拙稿「フレーベル教育学の方法理論—おとなと子どもの関係を中心として—」、関東教育学会紀要第4号, 昭和52年。
- 9) Vgl., W.Lange, a.a.O., S.558—559. 前掲訳書 p.625—626.
- 10) Vgl., *ibid.*, S.561. 同上訳書 p.630.
- 11)・12)・13) *ibid.*, S.561. 同上訳書 p.630.
- 14) W.Lange, a.a.O., Abt. 2, S.240. 前掲全集第4巻, p.494. 全集の訳は、「人間および人類の全生命は、教育の一つの生命である」となっている。
- 15) Bollnow: *Die Lebensphilosophie*, a.a.O., S.87—88. 前掲訳書 p.153—154 参照。
- 16) H.Bergson: *Introduction à la métaphysique*, 1903 ; *L'évolution créatrice*, 197 ; *Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932.